



公益社団法人 Knots 理事長・富永 佳与子
Kayoko TOMINAGA, Board Chairperson, PIIA Knots

それでは、私どものセッションらしく和やかな雰囲気になりましたところで、緊張を解いて始めさせていただきたいと思います。

CAC KOBE 2014 シンポジウムⅣ、「『ずっと一緒に居られる』社会へー飼い主を支えるシステムが実現する豊かな社会」ということでこの座を始めさせていただきたいと思います。私、本日、座長を務めさせていただきます公益社団法人 Knots 理事長の富永でございます。本日はよろしくお願いたします。

私ども Knots は、阪神・淡路大震災をきっかけに集まった飼い主の団体とさせていただければよろしいかと思っております。その中でたくさんのものをつないでいけば、いろんな大きなことができるよねと思っているということで名前が Knots、結び目という名前になっております。その名前のおり私どもが単独で何かができるわけではなく、皆様のお力をお借りして、たくさんの方のご助力を得て、いろんなことをやっていくということでやらせていただいております。2000年にNPO法人、2010年に公益社団法人となりまして現在に至っております。

私どもの事業領域は社会教育ということになります。その中で伴侶動物、産業動物、野生動物、いろんな動物との関係性があると思うんですが、全ての動物を対象に事業を行っております。その中で伴侶動物との関係性においてはどのようにあるべきかということで、「ずっと一緒に居ようよ」という事業を行っております。Knots のロゴマークは、「りぶ・らぶ・あにまるず」ということで全体の事業を展開しておりますが、伴侶動物に付いてはこちらの「Live Love OHANA」のロゴマークを使っています。OHANA はハワイ語で家族という意味です。伴侶動物はやはり家族であろうと。先ほど申し上げましたように、阪神・淡路大震災を経験したメンバーで設立した団体でございますので、そのときに我々が感じたことは「離れてはいけないよね」とい

うことでした。そこで「ずっと一緒に居ようよ」。私たちは飼い始めるときに多分、皆さんおっしゃったと思います。伴侶動物と暮らし始めるときに、「ずっと一緒に居ようね」って。だけど災害が起こったときに、阪神・淡路大震災、東日本大震災が起こったときに、それができなくなる状況があるんだなと多くの人が認識することができた1つのきっかけでもあったと思います。そうして考えたときに、そういった危機って、もしかして日常にもあるよねと。災害時に限ったことじゃないよねと。個人個人で考えたらいろんな目に遭うよねと。火事に遭ったりもするし、破産したりもするし、場合によっては離婚しちゃったりもするしって。そんなときに本当にこの家族とずっと一緒に居られるのかしらという不安はみんな漠然と持っていたはずだと思います。

その中で、日本の社会構成が変わってまいりまして、今、高齢化、単身化、ヒト人口の減少という今までにない社会動態を迎えようとしています。それが起こったときに、私たちもしかしたら一時的な災害の危機だけじゃなくて継続的な危機にも出会ってしまうのではないかしらという不安も皆さんお持ちではないかと思っております。

では、社会システムとして考えて何かあるのかしらと考えたら、意外と私たち、「飼い主頑張り」ということは、私ども団体も含めて、沢山言ってきました。終生飼養してください、躰してください、大事にしてください、ずっと言ってきました。

私ども、2000年からNPO法人をやっておりますが、飼い主さんは本当に頑張ってきたと思います。でも災害が起こったときに、飼い主さんにセーフティネットを用意できていたでしょうか。そのときに意外と無力感を感じたのは、動物に関わる業界の方々だったんじゃないかと思っております。私どもの団体自身も含めて申し上げます。

では、これからどうしていったらいいのかなというのが、もしかすると最後に残った大きな課題なのではないかと、私ども考えたわけです。そこで、社会システムとしてどんなものがあるのかなと考え、ビジネスで成り立つもの、そして福祉として成り立つもの、そういった2本立てがあるのではないかと。その分野で御見識のある皆様に、今回6名お集まりいただきまして、それぞれ御発表いただいて、それをもとにまた皆さんと「ずっと一緒に居られる社会の問題について考えていけるよう、これを1つのきっかけとなるセッションにできれば、私は大成功だと思っております。早速、トップバッターの方からお話をいただきたいと思いません。

